プラトンの「パルメニデス」一三一E——一三二Bについて

——所謂「第三の人間」とプラトンのイデア論——

田中美知太郎

一

プラトンの「パルメニデス」の一三〇Eより一三四Eの間に於いて、我々は、老パルメニデスが、若きソクラテスに對して、そのイデア論の含む若干の困難を指摘してゐるのに會する。而して、その一三一Eより一三二Bに於いて述べられてゐる次の如き困難は、アリストテレスの所謂「第三の人間」のそれである。卽ち、

君が各エイドスは一つであると思つてゐるのは、次のやうなところからであると、私は信ずる。雜多が(それぞれ)大であると君に思はれる場合、その全部にわたつてこれを見るならば、そこには(大といふ)一にして同一なる相(イデア)があると、恐ら

く思はれるであらう。この故に、君は、この大(自體)は一つであると、考へてゐる。然るに、この大自體とこれに對する(個々の)大なるものどもとは、もしも君が今したと同じやうに(もう一度)心でこれを全部にわたつて見るならば、そこには、それによつてこれら全部が必然に大としてあらはるべき、一個の大(自體)が別にあらはれはしないであらうか。從つて(今までの)大自體とその大自體を(己れが大なることの)原因としてゐる(個々の大なる)ものどもとに對して、更に、大の他のエイドスがあらはれることゝなるであらう。その上、これら(個々の大なるもの及び二つの大自體)全部に加へて、それによつてこれら全部が大たるべき、更に他の大自體が！そして、エイドスの各は――君には氣の毒であるが――もはや決して一つではなくして、多きこと無限であらう。」

W. Ross; Aristotle's Metaphysics (1924) I p. 195—6 參照。但し、私がこゝで言はうとしてゐるのは、この「パルメニデス」一三一の困難は、アリストテレスの意味する「第三の人間」の、少くも、一つの型式に一致するといふだけのことである。そして、それ以上、「第三の人間」といふ語を、アリストテレスは、いつも、一樣に、この意味ばかりに使用してゐるか、どうかといふやうなことは、こゝでは、問題の外にをかれる。

このイデア論的困難（アポリア）――この困難を所謂「第三の人間」の形で了解するには、右の「大」の雜多及びエイドスに代ふるに「人間」の雜多及びエイドスを以つてすればよい――の論證に於いて、最も目立ち易く且つ重要な部分は、各一定のエイドスまたはイデアが唯一ではなくして無限に多であるといふことを、與へられたるイデア論的諸前提から歸結せしめるところにある。然しながら、困難成立の條件は、これだけでは未だ不充分である。この歸結によつて、このイデア論が一つの困難に陷るがためには、更に、この歸結と兩立し得ないやうな他の何等かの命題がまた等しくこのイデア論の體系内に屬してゐなければならない。そして、かくの如き命題も亦既に與へられてゐる。卽ち、各エイドスは唯一である。則ち、我々は、相當の確實を以つて、この困難は、このイデア論が相兩立し得ない二つの命題「各一定のエイドスは唯一でなければならぬ」「各一定のエイドスは唯一ではあり得ぬ」を含んでゐるがために、生じたものであると考へることが出來るであらう。そして、我々は、しばらく、この假定の下に、與へられた「第三の人間」の困難を考へて見やうと思ふ。

さて、與へられた命題の一方は、「各エイドスは一つである」といふのである。具體的には、「大自體は一つである」といふのである。そして、「君が各エイドスは一つで

あると思つてゐるのは、次のやうなところからであると、私は信ずる」とか、「この故に、君は、この大(自體)は一つであると、考へてゐる」とかいふパルメニデスの言葉は、人をして、容易に、この命題は、その相手の命題と同樣に、やはり、一定のイデア論的諸前提から歸結せしめられてゐるのではないかと、思はしむるであらう。然らば、その前提は何であるか。我々は、殘るところ、たゞ「雜多が大であると思はれる場合、その全部にわたつてこれを見るならば、そこには(大といふ)一個の同一なる相(イデア)があると思はれる」といふ言葉をもつだけである。然しながら、何人にも明らかな如く、雜多なる大を全部にわたつて見るといふところから、大といふ一にして同一なる相(イデア)をそこに發見するまでの過程は、決して、論證の過程ではない。それは、イデア(相)を一種の仕方で定義したものに外ならない。卽ち、イデア(相)とは、雜多なる大が全部にわたつて見られる時、そこに見出される――多にして異つてゐるものではなくして――一にして同一なるものである。そして、勿論、このイデアはエイドスと同一義である。則ち、パルメニデスは、一三二Cに於て、「一にして、雜多全部にわたつて同一常住なるもの」がエイドスであることを語つてゐる。かくて、我々は、イデアを定義した命題一つを前提として有するに過ぎない。然も、我々は、この前提から、如何にして、イデアの唯一性

を推理し出すことが出來るであらうか？勿論、與へられたる定義中の「一」といふ言葉を唯一の意味に解釋するならば、卽ち命題を「大といふ唯一にして同一なる相(イデア)が云々」と讀むならば、そこから當のイデアの唯一性を推理し出すことは、至極簡單に、成立するであらう。然しながら、それは、同時に、推理し出されなかつたも同じいことゝなる。何となれば、當のイデアの唯一性は、既にその定義の中に、單獨に――卽ち、他のイデア論的命題との結合によることなしに、前提されてゐるのであるから。これに反して、與へられたる命題中の「一」が單なる一個を意味するならば、卽ち、前提は「大といふ一個の同一なる相(イデア)が云々」といふ命題であるならば、そこから當のイデアの唯一性を推理し出すことは、甚しく不確實となるであらう。何となれば、それは、言はゞ「一個のAがある」から「Aは唯一つあるのみ」を推理し出すが如きものであるから。また、與へられたる「一」の字の意味を單一と解するならば、卽ち、一三〇E――一三一Eに於けるゼレンマの一方「一」なるものとしてあり、また、同じきものでありながら、エイドスが、雜多なる、また、(互に)別々なるものどもの中に、全體のまゝで、同時に、內在する」とは！に於ける「一」の意味*に解するならば、從つて、命題を「大といふ單一にして同一なる相(イデア)が云々」と讀むならば、それは、「一にして同一」の最も正しい解釋に甚だ近いも

のではあるけれども、然し、當のイデアの唯一性をそこから推理し出すことが出來るか否かは、なほ問題である。何となれば、一つのものゝ單一性は、そのもの自身が部分の多に分割されることを拒否するけれども、同種のものがそのほかに多くあることを、必ずしも、拒外するものではないから。而して、同じことは、命題を「大といふ一にして同一なる云々」と讀む場合、卽ち、同一性――勿論、自己同一性の意味――の概念に重きをおいてイデア概念を理解する場合に於いても、言はれ得るであらう。何となれば、一物の自己同一性は、必ずしも、同種なる他物の多を拒否するものではないから。

――また、この場合「大自體は大自體自身に同じい。從つて、一の大自體であるものは、他の大自體であるものに同じく、また他のすべての大自體であるものに同じい。則ち、大自體は唯一つあるのみ」といふが如く推論するのは言ふまでもなく、誤りである。蓋し、それは「A(人間)はA(人間)に同じい。從つて、一のA(人間)であるもの(太郎)は、他のA「人間」であるもの(次郎)に同じい云々」と論ずるが如き類である。則ち、以上によつて、我々は、まづ、與へられたる「一」の字が唯一を意味する場合には、當のイデアの唯一性の推理は單なる形式に止るといふことを見、また、當の「一」の字が唯一とは異つた意味に解せられる場合、あるひは、當のイデア概念が他の風に解釋せらるゝ場合は、目指された

る唯一性の論證は必然性を缺くことを見た。――勿論、このほかにも、解釋は諸多可能であらう。然し、有望な解釋があるかどうか、少くも私には、思ひ當るものがないのである。

こゝの文章は、これだけでは、この一を唯一と解しても、なほ、充分有意義であり得る。然しながら、この文章につゞく前後の關係からして、特に、後のヘーメラーやヒスチオンの譬からして、我々は、この一を單一の意味に解さねばならなくなる。

我々は、むしろ、反對を考へた方が、簡單に行くのではないか。――否、當を得てゐるのではないか。即ち、事實、イデアの唯一性は、論證されずに、前提されてゐると考へた方が。實際、與へられたる文章の中にイデアの唯一性の論證を讀まねばならぬとする時、我々は、「大といふ一にして同一なる相(イデア)云々」の一が唯一性をも意味するものとして、當の唯一性は分析的に推理し出されたと考へるのが、最も自然と考へる。然も、この場合、當の唯一性は、實際には、既に見られたるが如く、推理し出されてゐるのではなくして、たゞかゝる外觀を有してゐるに過ぎない。――このことは、さきの場合には、困難であつたが、今の場合には、却つて、好都合である。則ち、我々は、唯一性の論證が最も無理なしに成立すると考へられる場所に於いて、却つて、それがはじめから

前提されてゐるのを知る次第である。然らば、何故に、パルメニデスは、イデアの唯一性を卒直に前提しなかつたか。何故に、あたかも論證し出すが如き口吻を洩したのであるか。私の信ずるところでは、この複雜さは、與へられたるパルメニデスの言葉の中に、老パルメニデス自身の立場のみならず、これと對立する若きソクラテスの立場までが反映させられてゐるが爲に生じたものである。パルメニデスにとつては、反駁すべき命題「大自體はたゞ一つあるのみ」が、論證的にせよ、また獨斷的にせよ、とにかく、ソクラテスのイデア論の體系内に與へられてをれば、それで充分なのである。これに反して、ソクラテスにとつては、同じ命題は、イデア論の體系内に何等かの偶然的位地を占めてゐるといふやうなものであつてはならなかつたのである。それは、イデア論のより根本的な命題から、必然的連鎖によつて、論證し出され得るものでなければならなかつたのである。――たゞ、この場合、イデアの唯一性の眞認識（エピステーメー）は、若きソクラテスにとつて、一個の憧憬に止つたのである。老パルメニデスは、この若者の心理を洞察した。そして、與へられたるイデアの概念と、そのイデアの唯一性の概念との、漠然たる結合によつて、若きソクラテスの漠然たる思ひ（ドクサ）に言葉を與へた。「一つであると思つてゐるのは」とか、「一にして同一なる相（イデア）があると、恐らく思はれる

であらう。この故に、君は……と考へてゐる」とかいふ言葉を注意して見よ。人は、もはや、私のこの解釋を晒はなくなるであらう。こゝでは、パルメニデスは、自分自身の確信によつて、イデアの唯一性を主張してゐるのではなくして、ソクラテスの心理を推量して、そのために、イデアの唯一性を語つてゐるのである。――「一」といふ言葉の多義*(單一、一個而して唯一等)を利用しながら。

「一」といふ形容詞が、個々の場合に於いて、前後の文章關係から、種々の意味に――卽ち、多義的に、解釋され得ることは、一般的に言つても、容易に人々の想像し得るところであらう。然し、この「一」といふ形容詞が特にイデアAに冠せられる場合に於いては、人は、なほ、その一が常に雜多。Aの多に對立する一の意味に解釋され得ることを注意しなければならぬ。そして、この意味の一は、一なるA自體の一が如何ほど多義的であるとしても、なほ、常にその「一」の主要なる意味である。人は、この一を統一的一と呼ぶことが出來るであらう。そして、パルメニデス篇一三〇E――一三二Bは、一面に於いて、イデアAの統一性とその單一性との關係、または、イデアの統一性とその唯一性との關係に對して、興味ある問題を提出してゐるものとも見ることが出來る。

命題「各エイドスは唯一つあるのみ」については、以上で充分であらう。――我々は、今や、與へられたる困難の論證の一半を考察し終つたわけである。次には、更に、殘りの半分が吟味されねばならぬ。而して、この部分の中心的命題は「各一定のエイドスは唯一つではあり得ない」といふ歸結の命題である。パルメニデスは、この歸結を、大自體が多くあるといふことの證明から導き出してゐる。まことに、人は、この命題を證明するがためには、たゞ二つの大自體、たゞ二つの人間自體が可能であるといふことを指摘し得れば、それで、既に、充分である。則ち、第三の人間の出現を證し得れば、それで、既に、充分である。それ以上は、三つの大自體を出して見ても、第四の人間を出して見ても、同じことである。否、無限に多くの大自體、無限に多くの人間自體を出して見ても、同じことである。それらによつて加へられるものは、單に、强勢であり、誇張であつて、命題そのものゝ眞理性ではない。然らば、第三の人間は、如何にして出現したか。我がパルメニデスは言ふ。「この大自體とこれに對する(個々の)大なるものどもとは、もしも君が今したと同じやうに(もう一度)心でこれを全部にわたつて見るならば、そこには、それによつてこれら全部が必然に大としてあらはるべき、一個の大(自體)が別にあらはれはしないであらうか」と。而して、この別にあらはれるであらう大自

體こそ第三の大である。則ち、第三の大は、さきの大自體をも雜多なる大の仲間に加へて、これらを、さきの大自體を求めたと同じ仕方で、全部にわたつて見さへすれば、得られるといふことになる。而して、人は、さきの大自體を雜多なる大の仲間に加へるがために、大自體も亦大である――大きい――としなければならない。同じく、赤自體は赤く、美自體は美しい！そして、パルメニデスも亦その如く呼んでゐる。即ち、大自體をも含んだ「全部が必然に大。とし。てあらはれる」といふやうに。さてさうすれば、それら等しく大なるものども全部にわたつて、そこに「大」といふ一にして――一個的にして單一的なる――同一なる相があらはれるであらうことは、前と同樣である。則ち、第三の大を出すに必要な前提は一、等しく大であるものども全部にわたつて一にして同一なる相がある。そして、それが大自體である。――これは、さきの場合のイデア大を定義する命題と同じである。二、大自體は大きい。といふ二つである。然しながら、この二つでは、未だ、第。三。の大を出すには、充分でない。何となれば、これらの前提によつては、未だ、そこに出た第三の大が果してさきの大自體と別であるかどうか、即ち、眞に「第三」の大であるかどうかゞ、證明出來ないから。かくて、我々は、第三の前提を必要とする。即ち、三、大自體は、それら全部にわたつてそれが一にして同一な

る相にしてあらはれてゐる、その等しく大なるものどもの各々とは別である――異る。これを、我々は、大自體の超越性に關する命題と呼ぶことが出來る。而して、この前提は、我々が今引用してゐるパルメニデスの言葉の中には、明瞭に出てゐないが、こゝに取扱はれてゐるイデア論に對しては、既に、豫定されてゐた前提なのである。何となれば、この「パルメニデス」篇の初めに於いて、ソクラテスは、ヅエノンの「もの若し多ならば、そのものは、常に、類似してゐると共に、また類似してゐないことゝならねばならぬ。然るに、それは不可能である」(一二七E)といふ論を批評するに當つて(一二九A―E)、エイドスのかくの如き超越性を、前提として約束したから。その超越性は、次の如きものである。たとへば、雪は、白砂糖に似てゐるが、黒砂糖には似てゐない。則ち、雪は、類似してゐるものであると共に、また類似してゐないものである。然しそれは、何か驚くべきことであらうか？否！もし人が、類似してゐるものと類似そのもの、類似してゐないものと不類似そのものとを混同しないならば、卽ち、類似してゐるものどもや類似してゐないものどもに對して、獨自なる類似そのもの獨自なる不類似そのものを別なものとして認めるならば、そこには何等の困難もなくなる。則ち、類似してゐる一つのものが、また同時に、類似してゐないものでもあるといふことは、直ち

に、類似そのものが不類似そのものであるといふ意味ではない。かく、類似そのものが類似してゐる個々のものとは別 Χωρίς であるといふのが、類似自體の超越性の意味である。たゞこゝでは、ソクラテスは、雜多なる類似と類似自體との關係を、等しく類似してゐるものどもとそれら全部にわたつて一にして同一なる相としてあらはれてゐるものとの關係としてゞはなく、等しく類似してゐるものどもとそれを等しく類似してゐるものたらしめる原因(アイチア)との關係として規定してゐるから、その超越性も亦、原因としてのエイドスの超越性となつてゐる。この故に、プラトンも亦、パルメニデスをして第三の大を語らしむるに當り、驚くべき例の用意周到を以つて、「……これらを全部にわたつて見るならば、そこには「一にして同一なる相(イデア)が」とは言はずに!!)それによつてこれら全部が必然に大としてあらはるべき、一個の大(自體)が云々」と言つてゐる。即ち、原因としてエイドスと共に、既に約束されてゐるその原因としてのエイドスの超越性をも持ちこんでゐる。然し、勿論、一般的に言へば、エイドスの超越性は、その原因性にのみ結びついてゐるわけではなく、さきの第三の前提に於けるが如く、原因性とは獨立にも規定出來るのである。——たゞ、後に於いて見られるであらう如く、原因性から規定する方が、一層單純であり、また明瞭で

ある。かくて、我々は、第三の人間が、與へられたる論證に於いて、如何にして出現せしめられたかを見終つたわけである。その大體は、右の三つの前提に要約されてゐる。そして、この第三の人間の出現は、既に見られた通り、かの「各一定のエイドスは唯一ではあり得ない」といふ命題の證明となる。

＊この原因としてのエイドスといふ概念は、この論文に於いて、特に、これから先に於いて、屢々あらはれる。のみならず、それは、重要な役割を演ずる。然しながら、その説明に至つては、私は「Aなるものどもを正にAたらしむる原因」といふより外、幾許のことをも與へ得ない。そして、この論文の目的のためには、それで、充分であると信ずる。この概念を徹底的に取扱ふことは、むしろ、別に、一の獨立な論文を要求するであらう。

二

與へられたる「第三の人間」の困難の大體の構造は、既に、明白である。まづ、そこには、イデアの意味を限定すべき若干の命題がある。一、事物が同じ名前で呼ばれる場合には――卽ち、もつと嚴密に言へば、同じ述語をとる命題の主語として言ひあらはさ

れる場合には、それらの事物に對して、それらに共通な――一にして同一なイデアが對立する。二、同じ名前で呼ばれる個々の事物と、そのイデアとは、互に、別物である。三、イデアも亦、その事物と同じい名前で呼ばれる。――否、同じい述語をとる命題の主語として言ひあらはされる。四、個々の事物が、各、そのあるところのものであるのは、そのイデアによつてである。――個々の美しきものどもが美しいのは、美のイデアを原因としてゞある。而して、これらの命題の組合せによつて定義されたイデアの概念に、相矛盾する二つの概念――卽ち、唯一性の概念と非唯一性の概念――が結びつけられる。――前者の結合は、獨斷的に、後者の結合は、論證的に。これが、與へられたる「第三の人間」の構造の大體である。たゞ、こゝで、人は、次の二つのことに注意しなければならぬ。まづ、相矛盾する兩概念が一の概念に結びつくといふことは、單にそれだけでは、既に類似不類似のゾエノンのパラドックスに對するソクラテスの批評に於いても見られたるが如く、直ちに困難となるものではない。今、大のエイドスを、ほかに大のエイドスはないといふ意味で、唯一であるとしても、その大のエイドスは、多くのエイドスの中の一個であり、多くの非物體的なるものゝ中の一個であり、また、多くの存在の中の一個であるから、從つて、このほかに何等のエイドスなく、何等の

非物體的なるものなく、また何等の存在なしといふ意味で、唯一であるとは、明らかに、言はれ得ない。則ち、大自體は、唯一であり、また、唯一でない。然し、そこには、何等の困難も生じない。困難は、たゞ、大自體のほかに大自體がないはづであるのに、大自體のほかになほ多くの大自體が出現するところにのみ、ある。また、大のエイドスのほかに、なほ多くの大のエイドスがある場合に於いても、その各の大のエイドスは、それ自身に於いて、唯一である。然しながら、かくの如き唯一性と、かの大のエイドスの多との間に、何等の困難も生じ得ないことは、明白である。――されば、人は、「各エイドスは唯一である」といふ命題を、凡百のエイドスの各は、それ自身に於いて、唯一である、といふが如き意味に解してはならない。次に、我々は、與へられたる論證に於いては、イデアの概念と唯一性の概念との結合は、むしろ、獨斷的に前提されてゐるのに、同じイデアの概念と非唯一性の概念との結合は、却つて、すこぶる用意周到に論證されてゐるのを見る。勿論、困難の本質そのものから見れば、この關係は逆であつても、困難の成立には、一向さしつかひないわけである。然しながら、かゝる場合に於いては、その困難は、たとへ本質的には同じことであるとしても、「第三の人間」のそれと呼ぶには適當しなくなるやうな論證形式をとるであらうことは、容易に、想像され得る。則ち、我々

は、イデアの概念と非唯一性の概念との論證による結合が、この困難の所謂「第三の人間」の形をとるがための、必要缺くべからざる條件であるといふことを、知らなければならない。――これに反して、イデアの概念と唯一性の概念との結合は、必ずしも獨斷的であるを要せず、また、勿論、必ずしも論證的であるを要しない。こゝからして、我々は、「二つのことを學ぶ。一には、こゝに批評されてゐるイデア論は、「各イデアは唯一つあるのみ」といふ命題及び「各イデアは唯一つのみあるにあらず」といふ命題を併せ含まなければならなくなる點に於いて、一の困難に陷るのではあるが、然し、このイデア論は、その本來の意志に於いては、たゞ前者の命題のみを含まむことを欲してゐるのであつて、出來るなら、後者の命題は含みたくないのであるといふこと。――何となれば、もし、今、このイデア論が、逆に、後者の命題を欲して、前者の命題を欲しないものとするならば、批評は、「第三の人間」の如き論證形式をとらずに、正にその逆の論證形式をとつたであらうから。そこでは、大自體の多ではなくして、大自體の唯一が、致命傷點として、批評者の論證の標的となつたであらう。勿論、當のイデア論が兩命題のいづれをも欲しない――いづれをも欲するといふやうなことは無意味である――場合に於いても、困難は「第三の人間」の論證形式をとり得るが故に、我々の如く、「第三の人

間」の論證形式があるからと言つて、直ちに、さきの如く推測するのは、早計であるが、然し、この場合に於けるが如く、イデア概念と唯一性概念の結合が獨斷的に前提されてゐる場合には、――それだけでも、既に、我々の如き推測を生せしめたのであるが――「第三の人間」の論證形式からして、このイデア論は「各イデアは唯一つある」といふ命題を欲してゐると推測することは、極めて正當であつて、その推測の結果は、充分確實であると言はねばならない。實に、もし當のイデア論が兩命題を共々欲してゐなかつたとするならば、イデアの唯一性も亦、その非唯一性の如く、用意周到に論證されなければならなかつたであらう。第二に、我々の學ぶべきは、この困難が困難として成立するが爲の條件と、この困難が持に「第三の人間」の論證形式をとるがための條件とを、嚴に、區別することである。人は、この區別を忽せにすることによつて、屢後者の條件のみを見て、前者の條件を見ないことゝなる。――たとへば、この困難は、各エイドスの無限の多が與へられたるイデア論的諸前提から歸結せしめられてゐるところに於いて、既に、成立してゐる」と考へたりする。

與へられたる困難の大體の構造については、以上で充分であらう。我々は、次に、その土臺について、若干の考察を試みたいと思ふ。卽ち、我々は、パルメニデスの言論を

分析するに先立つて、一つの假定(ヒポテシス)をなした。我々は「各種エイドスは唯一つあるのみ」各種エイドスは唯一つのみあるものにあらず」といふ相兩立し得ない命題がこのイデア論をこの困難に陷れたのであると見た。そして、この假定を、ほゝ三つの理由によつて、支持した。一には、一般に、かくの如き兩命題を一の理論が含む場合には、その理論は一の困難に陷るものであるから。そして、二、かくの如き兩命題が、事實、與へられたパルメニデスの言論の中に見出され得るから。三には、エイドスAの無限の多が歸結し出されるといふこと、たゞそれだけでは、何等困難の生ずべき理由とならぬから。――この點に關して、多くの人々は甚だ曖昧な考へをもつてゐるやうに見えるけれども。第一及び第二の理由については、我々は、多くを言ふの必要を認めない。蓋し、その各は、何人によつても、承認され得るであらうから、たゞこの理由によつたゞけでは、我々は、我々の假定を採用することを人々にすゝめることは出來るが、我々の假定のみを採用せよとすゝめることは出來ない。何となれば、同じやうな二つの理由によつて支持され得る他の假定も亦可能であらうから。――一、一般に、一の理論が一の困難に陷るのは、かの我々の二命題によつてのみであるとは、勿論、言はれ得ない。二、パルメニデスの言論は、たゞ、我々の假定したやうな困難の論證としてのみ解

釋され得るは、恐らく、斷言出來ないであらう。これが、我々の假定の弱點である。然し、この弱點は、第三の理由によつて、甚だ多くを救はれる。蓋し、この種の弱點は、今のところ、他の假定の批評によつて、最も多く救はれるやうに、少くも私には、思はれる。我々は、以下に於いて、この第三の理由について、少しく詳細に論じて見よう。――勿論、同じやうにして、我々は、第四第五の理由を擧ぐべきであり、また、それだけ我々の假定も强固となるはづであるが、然し、今のところ、我々は、幸か不幸か、ほかに有力な假定を見出し得ず、從つて、それらに對する批評としての第四第五の理由も述べられないのである。人々は、「かくの如くして無限に至つて止まぬであらう」ところのエイドスの多を漠然と想像しながら、この困難はエイドスAの無限多に於いて成立してゐると考へる。のみならず、人々は、「かくの如くして、無限に至つて止まぬであらう」といふやうな結論の形式だけで、その「何故？」を反問することなしに、困難の成立を信じてしまふ。かくて、彼等の假定が出來上る。一、一般に、一の理論は、「かくの如くして、無限に至つて止まぬであらう」いふやうな形式の歸結を含む場合には、一の困難に陷る。二、パルメニデスの言論は、かくの如き困難を論證せるものと解釋され得る。――この二つが、その假定を支持するが爲に呼び出された理由である。我々は、まず、その第一

の理由を吟味して見よう。正直に言つて、これは、呪文の不可解である。何故「かくの如くして、無限に至つて止まぬであらう」といふ結論が困難を作るのかは、一個の謎である。從つて、これだけの理由では、この假定は、萬人の承認を得ることが出來ない。

――少くも、我々は、かくの如き呪文の魔力の前に平伏するものではない。これに反して、我々の第一の理由は、矛盾律によつて說明され得る。まことに、論理の世界は、かくの如き妖怪の住むところではない。それは、隅から隅まで見透され得る明瞭透徹の世界でなければならぬ。神祕は、その暗黑に於いてゞはなくして、その明瞭透徹とその原則とに於いて見らるべきである。然し、我々は、彼等の第一の理由を、もう少し親切に取扱ふことが出來る。我々は、彼等に代つて、その「何故？」を推量し出すことが出來る。「エイドスAの無限の多が歸結として出されたがために、當のイデア論は一の困難に陷つたのである」といふ主張を、我々は、次の四つの意味に解釋することが出來る。卽ち、歸結の命題に於いて、

一、その文法的述語が「無限に多くある」といふのであるがため、而して、たゞそのためにのみ、困難は生じた。

二、その文法的述語が「多くある」といふのであるがため、而して、たゞそのためにのみ、

困難は生じた。

三、その文法的述語が「無限に多くある」といふのであるといふだけでは、困難は生じないが、この文法的述語にもかゝはらず、その主語が、外ならぬ！エイドスAであるがために、困難は生じたのである。

四、同じく「多くある」といふ文法的述語にもかゝはらず、その主語が、外ならぬエイドスAであるがために、困難は生じた。

さて、この四つの主張の「何故？」は、如何にして答へられるか。一は、依然として、一の謎の如くである。我々は、たゞ、あらゆる事物について無限の多――單なる多は知らず――が禁ぜられてゐるのであると考へることによって、辛じて、これを理解し得る。然しながら、かくの如き禁制に對しては、數學が抗議する。二は、一層極端である。そこでは、一切の多が禁ぜられる。かくて、我々は、一及び二の如き意味に於ける彼等の假定の支持すべからざることを知る。然らば、三は如何。これは、原則的には我々と同じい考へ方である。こゝでは、エイドスAの無限の多が禁ぜられてゐる。――然し、その單なる多は必ずしも禁ぜられてはゐない！然るに、エイドスAの無限の多が歸結として出て來た。こゝに困難がある、といふわけである。それ自身としては、こ

の考へは正しい。然しながら、もし彼等の假定がこの意味であるとすると、それは、第二の理由を缺かねばならなくなる。蓋し、パルメニデスは、エイドスAの無限の多のみを封じて、その有限的多を許容してゐるとは、解釋され得ないから。かくて、我々は、四を有するのみとなつた。こゝでは、エイドスについて、一切の多(無限多も有限多も)が禁ぜられてゐる。* 而して、困難は、この禁制にもかゝはらず、エイドスAの多が歸結せしめられるところに、卽ち、禁制とその干犯に於いて、生じたものと見られてゐる。何人にも明らかなるが如く、これは、正に、我々のとつた假定である。彼等の主張は、無限多も亦一種の多であるといふ限りに於いて、この意味にも解釋され得るのであるが、而して、それは實に寬大な解釋である！然し、多卽ち無限多ではないから、その限りに於いて、無限に拘泥した彼等の言葉彼等の表象は、不幸にも、不完全となる。かくて、我々は困難成立の條件については、今のところ、我々の假定したやうなものしか見ることが出來ないことを知る。そして、これが、我々の假定のとらるべき――あるひは、すゝめらるべき第三の理由である。

＊エイドスAについて一切の多を禁ずるの命題は、必ずしも、獨斷的前提であるを要せない。それは、他の前提から論證されたものであつてもさしつかへない。た

ゞ、この場合には、その前提が問題となる。何となれば、一及び二に於けるが如き前提「何ものも多くはない」からも、エイドスAの多を禁ずるの命題が論證し出されるから。

三

我々の「第三の人間」の困難は、如何に論證されるか？我々は、既に、それを部分部分に分析し、その組織の大體を研究しをはつた。今や、我々は、それを、その行動に於いて――即ち、その動態を、觀察しなければならない。そして、我々は、次に於いて、このことを試みるであらう。即ち、我々は、次の如くに「第三の人間」を組立てる。

一、xがAである場合、xは、x自身のAなることそのことの原因αἰτίαではあり得ない。

二、x y z 等々がAである場合、x y z 等々がAであるといふことそのことだけの共通にして同一なる原因を、A自體または本質A等々といふ。而して、AなるxとA自體との關係は、また、次の如くも言はれ得る。xがAであるのは、xがA自體をμετέχεινしてゐるからである。または、xがAであるのは、A自體がxをκατέχεινしてゐるからである。

三、A自體は唯一つあるのみ。

四、A自體は、自身、Aである。

五、B自體がAであつて、そのAであることの原因がA自體である場合、もしxがBであるならば、從つて、そのBたることの原因がB自體であるならば、xは、また、必然に、Aでなければならぬ。そして、B自體がAであることのと共通にして同一なる原因A自體を有さねばならぬ。別な言葉で言へば、B自體がAであつて、A自體を μετέχειν してゐる場合、もしもxがBであつて、從つて、B自體を μετέχειν してゐるならば、xは必然に、Aであつて、A自體を μετέχειν してゐなければならない。

の五つの命題(文中、x y z 等は、命題の主語たり得る任意の言葉を代表し、また、A B 等は、同じく、その述語たり得る任意の言葉を代表するものとする。逆に言つても、同じことである。即ち、A B 等は、命題の述語たり得る任意の言葉を代表し、x y z 等は、その主語たり得る任意の言葉を代表する)を前提するならば、

命題四により、A自體はAである。然るに、命題一によつて、AなるA自體は、自分で自分自身Aであることそのことの原因となることは、出來ない。從つて、A自體がAであるといふことそのことの原因は、もしありとすれば、それは、x y z 等々——勿論、

このｘｙｚ等々は、命題二に於いて假説せられたやうな、Ａ自體に依てＡなるｘｙｚ等々である――のどれかなるか、または、ｘｙｚ等々でもＡ自體でもない第三者なるか、でなければならぬ。今、この原因をｘなりとすれば、假説に依て、ｘはＡであつて、このＡ自體をそれ自身のＡたることの原因としてゐるから、結局、それは、Ａ自體がＡであつて、ｘを μετέχειν し、然も、そのｘが、また、Ａであつて、Ａ自體を μετέχειν するといふことになる。從つて、それは、Ａ自體がＡであつて、ｘと共に、Ａ自體を自分自身がＡたることそのことの原因とするといふことになる。――命題五。然るに、それは不可能である。――命題一。從つて、ｘはＡ自體がＡであることそのことの原因ではない。ｙｚ等々に就ても、亦同樣である。從つて、その原因は、ｘｙｚ等々でもＡ自體でもない第三者でなければならない。然るに、この第三者は、Ａ自體のＡであることの原因であるが故に、命題五に依て、また、ｘｙｚ等々がＡであることそのことの原因でもあり得なければならぬ。從つて、この第三者も亦Ａ自體である！命題二によつて！即ち、Ａ自體は、少くも、二つはあり得ることゝなる。然るに、これは、命題三に矛盾する。

＊ μετέχειν（メテクテイン）は、見らるゝ如く、雜多ＡのＡ自體に對する關係である。普通、participate, participer, teilhaben と譯される。但し、シライエルマッヘルは in sich aufnehmen と譯して

ゐる。「分有」「干與」は、その邦語譯であるが、あまり適當ではないやうである。――菊池講師は、これを、文字通りに、俱有と譯してをられる。（譯書「プロタゴラス」四五頁）

κατέχειν は、逆に、A 自體の雜多 A に對する關係をあらはす。

四

今や、我々は、二つの問題に當面する。與へられたる「第三の人間」の論證は果して正しいか？といふのが、その一つである。この攻擊は果してプラトンのイデア論――特に「パイドン」「シムポジオン」「ポリティア」等に於ける代表的イデア論――に當るか？といふのが、他の一つである。而して、後者は、この論文の題名によつて既に約束されてはをるが、然し、とにかく、これまでの我々にとつては、全然あらたな問題である。

我々は、便宜上、後者の問題から解決して行かうと思ふ。前者の問題については、しばらく、與へられたる論證を、正しいものと假定する。則ち、我々の問題は、プラトンのイデア論は所謂「第三の人間」の困難に陷つてゐるか？である。而して、「パルメニデス」一三一E――一三二Bを書いたプラトンの心理を揣摩憶測することは、今の我々の問題ではない。――人は、この二つの問題を、嚴に、區別しなければならぬ。否、それの

みならず、いづれが基礎的な問題であるかを分明にしてをかねばならぬ。言ふまでもなく、我々の問題の解決は、プラトンの心理を憶測するがための重大な手掛りを與へる。然し、我々の問題の解決は、卽ち、プラトンのイデア論がそれ自身客觀的に「第三の人間」の困難に隔つてゐるか否かの決定は、プラトンの心理が如何なるものとして推測されるかといふことによつて、左右されるものではない。然らば、我々は、如何にして我々の問題を解決すべきであるか。解決の方法は、當の問題そのものが與へる。——卽ち次の如く言ひ改められるならば。プラトンのイデア論は「三」に於いて我々が立てたかの五つの命題を含んでゐるであらうか？卽ち、我々は「パイドン」「シムポジオン」「ポリテイア」等に於けるプラトンのイデア論について、このことを、逐次見て行けばよいのである。そして、このことは、我々の當面の問題を解決するだけのことには、必ずしも必要ではないのであるが、なほ、他の事に役立つことが出來るであらうといふ希望を以つて、我々は「一」の後半に於いて分析し出した三つの命題及び「二」のはじめに與へた四つの命題をも、あはせ見て行きたいと思ふ。——もともと「一」「二」「三」の諸命題は、同種のものであるから、このことの實行は、容易である。

命題一命題二に關しては、私は、それが「パイドン」一〇〇C—Eに於ける「美自體以外

の他の何ものかゞ苦し美しいとするならば、それは、かの美(自體)を μετέχειν してゐるから、美しいのであつて、その他の故にでは、何一つない」といふ主張の一種の言ひ換へに過ぎないことを告白しなければならない。即ち、美自體(A自體)以外のもの(x y z 等)が美しくある(Aである)のは、たゞ、美自體(A、自體)による。それ以外のものには決してよらぬ。從つて、美自體ならぬ x y z 自身にもよらぬ。――これが命題一である。命題二(二)の命題四)に關しては、たゞ「x が A である」のは、x が A 自體を μετέχειν してゐるからである」といふところを指摘するだけで、既に、充分であらう。そして「その他の故にでは、何一つない」のであるから、人は、逆に「自體とは……」といふ風にも言ふことが出來るわけである。――命題二の前半はこれである。

我々は、さきに「一」に於いて、類似自體が類似せる雜多のものどもとは異るといふこと――このことは、パイドン七四A―Bに於いても、等自體が雜多なる等しきものどもより異 といふ風に言はれてゐるが――を、かの第三前提(エイドスの超越性に關する命題)のやうな形で「二」に於いては、第二命題のやうな形で、規定したけれども、これは、こゝの命題一及び命題二から歸結せしめることが出來る。即ち、雜多A(ταλλα)(雜多なAなるものどもといふことの略稱。既に、しばしば用ひたり)は、雜多A自身のAたるこ

とそのことの原因たり得ない。――命題一。然るに、A自體（アルバト）は、この雜多AのAたることとそのことの原因である。――命題二。從つて、A自體と雜多Aとは同じでない。即ち、異る。

命題三に關しては、「ポリテイア」第十卷五九七Cに、「神は……かの眞に寢椅子であるもの自體を唯一つだけ作つた。何となれば、もし（一つでも餘計に、即ち）二つだけでも作るならば、更に、一なる寢椅子自體があらはれ出で、（さきの）二つの寢椅子自體の方は、これに對して、その一なるものから、（寢椅子といふ）相をもらつて、もつてゐることゝなり、眞に寢椅子であるものは、かの（一なる）ものであつて、この二つのものではなるであらう」とある。この「二つの寢椅子自體に對して、更に、一なる寢椅子自體があらはれ出る」といふことについては、同書同卷のはじめ五九七Aに、「我々が同じ名前を負はせる各種多について、各、何か一つ一なるエイドスを立てる」と約束されてゐる。――同じやうなことは、同書第六卷五〇七Bに於いても述べられてゐる。從つて、二つの――即ち、多なる――寢椅子自體が等しく寢椅子と呼ばれてゐる以上、それに對して、更に、一なるエイドス「寢椅子」を立てることは當然である。また「二つの寢椅子が、一なる寢椅子自體から、寢椅子といふ相（エイドス）をもらひ受けて、もつてゐる」といふこ

とについては、パイドン一〇三Eに、「たゞに、エイドス自身が自分自身の名(たとへばA)を永遠に(冠せらるゝことを)要求するのみならず、また、其の他のものでも、自分はエイドスそのものではないけれども、然も、そのエイドスの(たとへばAといふ)形相(モルペー)を、それがAならAである限り、常に、(もらひ受けて)もつてゐる」とある。而して、それ以下に於いて、更に、雜多について、「相(イデア)をもつてゐる」(一〇四D2)*とか、「相(イデア)を受けとる δεχομένοις」(一〇四B9)とかいふことが言はれてゐる。また、「相(イデア)が、その雜多の中に内在してゐる」(一〇四B10及び一〇二B5など)とも言はれてゐる。則ち、プラトンに於いては、xがAであるといふことは、また、xがAといふ相をもつてゐるといふことである。xの中にAといふ相(または、A自體?)**が内在してゐるといふことである。従つて、我々は、二つの寢椅子が「寢椅子である」と言はれてゐる時、これを、また、この二つの寢椅子は「寢椅子」といふ相をもつてゐるといふ風にも言ふことが出來るわけである。而して、xがAであるのは、約束――命題二――によつて、xがA自體を μετέχειν してゐるからである。A自體がxを κατέχειν してゐるからである。従つて、xがAといふ相をもつてゐるのは、xが自分で始めからAといふ相をもつてゐたのであるからではなく、xがA自體を μετέχειν してゐるからである。然るに、このA自

體は、xの中に內在してゐるA自體(?)に對しては、「自然に於けるA自體」***純粹なA自體)である。xの中に特殊化されたAといふ相に對しては、純粹にそれ自身なる普遍的形相Aである。從つて、我々は、二つの寢椅子が等しく「寢椅子」といふ相をもつてゐるのは、一なる寢椅子自體――普遍的相「寢椅子」――からその相をもらつてもつてゐるのであると言ふたとしても、大した不都合にはならぬであらうと思ふ。

*この洋數字は、バーネットのプラトン全集に於ける行數を示す。

**「パイドン」一〇二D及ε―7及び一〇三B 4―5など參照。

***「パイドン」一〇三B

こゝまで來れば「二」に於ける第一命題の意味は、既に、明瞭である。同じく「一」の第一前提の意味も、容易に理解される。多くのものどもが等しく大である場合、卽ち、等しく「大」といふ相をもつてゐる場合、そこに一なる大自體(あるひは、純粹なる普遍的形相「大」が立つのは、當然である。而して、美自體の追求は、「シムポジオン」二一〇Bに於いては、すべての肉體に於ける美 Τὸ ἐπὶ πᾶσιν αὐτοῦ κάλλος が「一にして同一」であると考へるところから始つてゐる。のみならず、「パイドン」七四B―七五Bに於いては、雜多なる等を見て、それらのものどもからして等自體をさとるといふ心理が述べられてゐる。

――たゞ、私の考へでは、かういふ風な仕方で得られたゞけのA自體は、單に「何かである」ものとして思ひ浮べられてゐるに過ぎないのであつて、未だ「何である」として眞に知られてゐるのではないやうに思はれる。この眞の知(エピステーメー)に達するがためには、人は、更に、學ばなければならない。本當の意味の想起(アナムネーシス)をしなければならない。そして、この意味の想起は、むしろ「メノン」九七E―九八A及び八五C―八六Aなどに於いて、說かれてゐる。人は、より根本的な問ひによつて絕えず一のヒポテシスからより根本的な他のヒポテシスへとかへつて行くかのヂアレクチケー*に、身を――否、たましひを投じなければならない。認識(エピステーメー・プロネーシス・グノーシスまたはノエーシス)の對象としてのプラトンのイデアは、決して、單なる抽象概念の對應ではない。それは、實に、かのヂアレクチケーの對象である。否、單なる對象以上である。それは、ヂアレクチケーの目的(テロス)であり、また、その產出點(アルケー)である。否、それに不斷の運動を與へ生命を與へるところのもの、卽ち、ヂアレクチケーのたましひである。それは、ソクラテスの所謂「不知の自覺」οὐδὲν γὰρ οἶδα に於いて、はじめて、課題 τί ποτ' ἐστιν; としてあらはれ來るのである。そして、その自覺の絕えざる深化と共に、絕えず、より根本的な答へから、更に、より根本的な問ひへと、言はゞ、自己を開展して行くの

である。――つひに忽然として ἐξάπινης かの「驚異すべきもの」[**]が見られるまで！

*「ポリティア」五一〇B及び五一一B参照

**「シムポジオン」二一〇E

命題四――「二」の第二前提「二」の第三命題――に關しては、我々が今し方引用したかの文章（「パイドン」一〇三E）だけで、既に、充分 ユある。即ち、我々は、「たゞに、エイドス自身が自分自身の（たとへば、A）を永遠に（冠せらるゝことを）要求するのみならず云々」によつて、既に、A自體が「Aなり」と客語づけられることを知ることが出來る。事實「ポリティア」第十卷のかの議論に於いても、二つの寢椅子は、寢椅子「自體」であるにもかゝはらず、然も、何の遠慮もなしに「寢椅子と」いふ相をもつてゐるもの「寢椅子」と呼ばれるものとして取扱はれてゐる。また、その上、寢椅子自體が「寢椅子」と呼ばれないならば、寢椅子自體が假令二つあつたとしても、更に他の一なる寢椅子自體を要するの理がなかつたのである。[*] 否、プラトンに於いては、A自體は、單に「Aである」といふ文法的述語をとり得るといふだけのものではない。むしろ何よりも、まづ「Aなり」と呼ばるべき第一のものでなければならないのである。我々の「AはAなり」といふ命題は、プラトンにあつては、「A自體はAなり」なのである。かくて、プラトンは、「プロタゴラス」[**]三三〇D

一Eに於いて、苟も敬虔自體(女性名詞)が敬虔(中性形容詞)でないならば、勿論、他の何一つとして敬虔であることは難いであらう[***]と言うてゐる。

＊なほ「パイドン」七三B—C及び「クラチロス」三八九A—Bなど參照。

＊＊プラトンのイデア論は「パイドン」「シムポジオン」「ポリテイア」などに至つて、忽然と始るのではない。たゞこれらに於いて、仕上げをされてゐるだけである。我々は、「ユーチプロン」「メノン」などに於いても、既に、イデア論を見出すことが出來る。未だ仕上げの出來てゐないイデア論ではあるが。否、類似せるものどもと類似そのもの(類似のエイドス)、敬虔な人々と敬虔そのもの(敬虔のエイドス)との區別を數へる限りのイデア論は、所謂「概念の發見者」としてのソクラテスにまで溯ることが出來るであらう。かくて、我々は、「プロタゴラス」に於いても、一、德をメテツケインすることによつて、人は、有德となる。正義の德をメテツケインする者は、正しく、勇敢の德をメテツケインする者は、勇敢である。——三二九E。二、正しい人とは別な正義そのもの、敬虔な人とは別な敬虔そのものが、一の獨立した事物(プラーグマ)である——三三OC及びD。といふイデア論的思想を發見する。私は、正義の德と正義自體を別物と考へることは出來ない。同じく、德と德自體も同じと見る。別

物と見る人は、エイドスをあまりに物々しいものと考へてゐるのではないか。

＊＊＊この女性名詞と中性形容詞との結合には、別に困難はない。――R. Kühner, Ausführliche Grammatik der griechischen Sprache (1904) § 360

こゝからして、我々は、パラデイグマ(手本)としてのイデアといふプラトンの思想を理解することが出來る。即ち、A自體も雜多Aも共に「Aである」とするならば、即ち、A自體も雜多Aも共に同じいところがある τοῦτον πεπονθέναι とするならば、「パルメニデス」一三九Eに於ける「類似」の定義により、兩者は互に類似してゐることゝなる。然も、まづ「Aである」ものはA自體であるとすれば、後から「Aである」ものとなる雜多Aは、Aを原像(パラデイグマ)としたその模像の如きものとなる。則ち、パラデイグマ説の根本は、一、A自體と離多Aとの類似。二、その類似點に於ける、A自體と離多Aとの、原像模像の如き關係。――の二つである。そして、かくの如き考へは、「パイドン」『ポリテイア』「クラチロス」その他に於いても見ることが出來るやうであるが、公然の説明は、「パルメニデス」一三二D―一三三Aに於いて見られる。たゞ、こゝでは、イデアは、類似者としての方面からのみ見られてゐて、パラデイグマとしての方面からは、パラデイグマとしてのイデアといふことが言葉に出して言はれてゐるにもかゝはらず、あまり

よく見られてゐないから、その點、注意を要する。

*「パイドン」七五A。「クラチロス」三八九A―B

J. Adam, the Republic of Plato (1902) Vol. II p. 173

命題五に關しては「パイドン」一〇四Dに「三のイデアが何物かを κατέχειν するならば、そのものは、必然に三つであるばかりでなく、また、奇數的でなければならぬ」とある。そして、これの、言はゞ、前提ともなるべきより普遍的な命題に於いては、一のエイドスが何ものかを κατέχειν するならば、そのエイドスは、「そのものをして、たゞに、エイドス自身の相(イデア)(たとへば、三の相)をもたしめるばかりでなく、そのエイドス自身が常にもつてゐるところのある反對的なるもの*(たとへば、奇數性――偶數性に反對するもの)の相をも有せしめる」といふ風なことが言はれてゐる。――一〇四D。そして、命題五は、この「ある反對的なるものゝ相」の代りに「任意の相A」を以つてしたゞけのことで、形式論理で言へば、「すべてのBなるものがAであり、また、今、xがBであるとするならば、xは、必然に、Aである」といふことになる。

*こゝの原文を、私は、ἐναντίου αὐτῷ δὲ τινος ⟨ὄντος⟩ の如く讀む。かく讀むことによつて、私は、最古の傳統をもつMSから支持を得ることゝなる。αὐτῷ の譯に關しては、

前掲キューナーの文法四五五節の5参照。私は、バーネットと共に、αὐτῷ をとり除くことの必要を認めないものである。否私の譯にあつては「そのエイドス自身がもつてゐるところの」といふ條件は、絶對に、必要である。この點、私の解釋の方が、バーオットの "The opposite in question" といふ解釋よりも、より多く αὐτῷ の缺くべからざる所以を説明する。また、この譯によつて、私は、R. Archer-Hind, The Phaedo of Plato (1894) p. 112—3 に於ける「もし αὐτῷ をとり除かないならば、人は、シミッドと共に、ἀεί を δεῖ と讀むより外、この文章を有意味に讀むことが出來ない。然るに、云々」といふ主張に對しても、斷然「こゝに、なほ、その一つの讀み方がある」と答へることが出來るであらう。

斯て、五つの命題は、孰れも、プラトン的である。我々は、如何に結論すべきであらうか。プラトンのイデア論は、所謂「第三の人間」の困難に陷ねばならないのであらうか？

五

然し、最後の言葉は未だである。

我々は、五つの命題を、プラトン的と呼んだ。然し、なほ、二つの少しの相違點に氣づ

かぬではない。即ち、一には、かの「美自體以外の他の何ものかゝ若し美しいとするならば、それは、かの美(自體)をメテッケインしてゐるから、美しいのであつて、その他の故にでは、何一つない」といふ「バイドン」の思想と、「xがAである場合、xは、x自身のA、なることそのことの原因ではあり得ない。そして、このxがA自體である場合とても、同じである。」といふ意味に解された命題二との相違が、これである。言ふまでもなく、我々は、「バイドン」のかの文章からは、美自體が美しい場合は如何といふことを、明確には、知ることが出來ない。然るに、この命題一をA自體にも適用するといふことは、「第三の人間」の論證には、是非、必要である。二には、命題三と、「ポリティア」第十卷のかの文章との相違が、これである。前者は、獨斷的前提、後者は、論證せられた歸結。然も、この論證中の言葉は、注目に値する。「眞に寢椅子であるもの(即ち、眞の寢椅子自體)は、かの(一なる)ものであつて、この二つのもの(=二つの寢椅子自體)ではない。」何となれば、「(この)二つの寢椅子自體は、その一なるものから、(寢椅子といふ)相をもらつて、もつてゐることゝなる」からである。而して、その隱れたる大前提は、「A自體は、Aといふ相を他に與へるものであつて、他からAといふ相をもらつてもつてゐるものは、A自體ではない」であらう。かくて、我々は、一、「A自體は、自分で、自分自身のA、たること、そのことの原

因とはなり得ない」といふ思想は、何等、プラトンからの確實な支持を得てゐるものではない。二、A自體が、自分のAたることそのことの原因として、もし自分自身以外のものをもつならば、そのA自體は、A自體でなくなる。――といふ二つのことを知る。卽ち、A自體は、自分で、自分自身のAたることそのことの原因とならねばならぬ！そして、かくA自體を考へることが出來るならば、命題一のA自體に對する適用が禁止されるから、「第三の人間」の出現も不可能となる。「第三の人間」の論證は、「命題四により、A自體はAである。然るに、命題一によつて、AなるA自體は、自分で自分自身のAであることそのことの原因となることは、」と言はうとするところで、早くも、行き詰つてしまふ。則ち、我々は、プラトンのイデア論は、必ずしも、この「第三の人間」の困難に陷るものではないことを見る。

＊最近、私は私のこの解決法が必ずしも孤獨でないことを發見した。K. Goebel, Ueber den Platonischen Parmenides. (1880) s. 74—5 に「この(イデア論)攻擊は、Substanz と Accidens との區別によつて、うち破られる。何となれば、イデアは、その述語を、自分自身によつて、もつてゐるのであつて、何か他のものによつて、もつてゐるのではない。卽ち、述語によつて限定される有(たとへば「Aである」)の原因は、それ自身の中にある。こ

れに反して、諸物は、述語を、自分自身によつてもつてゐるのではなくして、イデアによつてもつてゐるのである。從つて、イデアは、自分の有を限定すべき第三者を、別に、必要としないのである。云々」とある。

然らば、A自體を自分で自分自身のAたることそのことの原因となるものと考へることは、何か、プラトンの世界に於いて許すべからざることを歸結せしめることゝなるであらうか。我々は、勿論、その如何を、あらゆる場合にわたつて、今、直ちに決定するわけにはゆかない。たゞ、我々は、その如何を、我々がこの論文の中に於いて知つた限りのプラトンのイデア論について、見て行くより外はない。則ち、問題は、この考へによつて、プラトン的としたかの五つの命題は、何か、致命的打擊を受けるであらうか？である。

命題一については、そのA自體に對する適用が禁止される。然し、それは、命題一を破壞するものではない。むしろ、命題一の疑はしい――プラトン的と保證され難い――意味を取り除いたことゝなる。とにかく、この命題は、雜多A雜多B等にのみ適用されるとしても、立派に、プラトン的命題として立つて行く。

この考へが命題二を破壞するものでないことは、明白である。否、この考へによつ

て、A自體は、あらゆるAなるもの――即ち、AなるA自體及びA自體以外の一切のAなるものゝAなることそのことの原因となる。則ち、A自體は、あらゆるAなるものゝ最終の統一者となる。

命題三については、言ふまでもない。イデアの唯一性は、この考へによつて、救はれたのである。

また、イデアの超越性の命題も、命題一及び二の成立によつて、無事に成立する。たゞ、第三のAの自體に對する超越性といふやうなものが、否定される。――こゝからして、「一」に於けるが如きパルメニデスの論證も亦、不成立となる。

命題四を否定しないことは、我々の解決法の一つの長所である。人は、「パルメニデス」一三二Bに於けるソクラテスの如く、イデアを思想（ノエマ）に過ぎずと考へて、即ち、赤の概念は赤くないと考へて、それで、この困難を脱することが出來ると思ふかもしれない。然しながら、イデアを、かくの如く、單なる抽象的概念の世界に追放することは、パルメニデスが正當にも注意したやうに、決して、最後の解決となるものではない。赤の思想は、既に、赤を豫想する。然も、赤！このたゞ赤い赤！これが、むしろ、當の――具體的普遍的なる――イデア「赤」なのである。

のみならず、かの「パイドロス」二四五C―Eに於ける「自分で自分を動かすもの」(卽ち、自動者)の論を、若しこの「自分でAであるもの」としてのA自體に適用するならば、人は、容易に、A自體「Aとなる」こともなく「でなくなる」こともなく、永遠に「Aである」ことを、さとり得るであらう。そして、これこそ、プラトンが、A自體を「永遠にあるもの」ἀεὶ ὄν と呼び、また、更に「眞にAであるもの」*ὄντως A「眞にあるもの」ὄν ὄντως と呼んでゐる所以なのではないか、と考へるであらう。

命題五も亦無事である。何となれば、M自體の自己原因性は「Mである」ことにのみ關してゐて、「Nである」ことには關せないのであるから。

かくて、我々は、結論することが出來る。プラトンのイデアが、我々の規定したやうな意味に於いて、もし自己原因的であるならば、プラトンのイデア論は、與へられたるが如き論證によつては、困難に陷るものではない。然も、プラトンのイデアをかゝの如く解釋することは、大體に於いて、不可ではない。それは、イデアの超越性、內在性、具體性のいづれをも犧牲にしない。

六

我々には、もう一つ問題がのこつてゐる。「三」に於ける「第三の人間」の困難の論證は果して正しいか？といふのが、それである。我々の假定によれば、與へられたる困難は、當のイデア論が「A自體はたゞ一つあるのみ」「A自體はたゞ一つのみあるものにあらず」といふ相兩立し得ない兩命題を含むがために、生じたのである。ところで、「三」は當のイデア論がこの命題二つを含むことを、果して、滿足に證明してゐるであらうか。「A自體はたゞ一つあるのみ」については、何も言ふことはない。然し「A自體はたゞ一つのみあるものにあらず」は、果してこのイデア論に屬するであらうか？このことの證明には、この命題が與へられたる前提若干の組み合せから歸結せしめられ得ることを示したゞけでは、不充分である。人は、逆に、この命題が否定されるならば、前提のどれかゞ根本的に破壞されねばならなくなることを、證明しなければならぬ。さて、我々のイデア論に於いては、如何。A自體の多の證明に、我々は、命題三を除いた他の四つの命題を前提として使用した。今、歸結の命題が否定されるならば、必然に、この四つの命題のどれかゞ不成立となるであらうか。否、我々は、この論證には、單なる四つの命題のみが前提されてゐるばかりでなく、なほ「もし命題一がA自體にも適用されるならば」といふことが前提されてゐることを知る。然も、この前提は、一般論理法

則的前提でもなければ、絶對的なイデア論的前提でもない。それは、たゞ、命題一だけを單獨にひきぬいて、その可能な解釋を、試驗的に、述べた　でのものである。そして、一度この命題がイデア論の理論體系の中に入るや、この解釋は、もはや、命題一單獨では決定されずに、諸前提との關係によつて決定される。人は、このことの吟味を、丁度、[三]の如き仕方で、行ふことが出來るであらう。卽ち、「もし命題一がA自體――命題四により、A自體はAである――にも適用されるならば、卽ち、A自體は自分自身のAであることそのことの原因となり得ないならば、その原因となるものは、x y z 等々のどれかなるか、または、x y z 等々でも自體でもない第三者なるか、とにかく、いづれかでなければならぬ。然るに、それはx y z 等の中のどれでもあり得ぬ。從つてそれは、かの第三者でなければならぬ。然るに、この第三者は、A自體のAであることの原因なるが故に、命題五によつて、また、x y z 等々がAであることそのことの原因でもあり得なければならぬ。從つて、この第三者も亦A自體である。則ち、A自體は、少くも、二つはあり得ることゝなる。然るに、これは、命題三に矛盾する。從つて、命題一のA自體に對する適用は、不可能である」則ち、A自體の多の否定は、必ずしも、イデア論的前提を不成立にするものではない。從つて、「A自體は唯一つのみあるものではない」

といふ命題は、必ずしも、このイデア論に屬するものではない。從つて、「三」の論證は、困難の論證としては、不充分である。「第三の人間」の論證は、既に命題三によつて禁ぜられてゐる命題一のA、自體への適用の上に立つ、一個の誤謬、一個の假象に過ぎない。從つて、プラトンのイデア論が、與へられたるが如き「第三の人間」の困難に陷るべきものでないことは、今や、明々白々である。

かくて、我々の大體の仕事はをはつた。我々は、まづ、この論文の「一」「二」「三」に於いて、「パルメニデス」一三一E—一三二Bをその一例とするが如き種類の困難、卽ち、所謂「第三の人間」の困難の一種類が、抑も何であるかを、大體明瞭にした。次いで、「四」「五」に於いて、そのプラトンのイデア論に對するの關係を見た。そして、最後に、「六」に於いて、我々は、この所謂「第三の人間」が何であるか、また、プラトンのイデア論はこの困難に陷つてゐるかどうか——といふ二つの問題に對する最後？の答へを得ることが出來た。

後記　この論文を通じて、私は、「トリトス・アントローポス」を「第三の人間」と譯して來た。然しながら、私は、必ずしも、この譯語を固執するものではない。否、「第三の人」を譯す方が、あるひは、無難かも知れない。たゞ、「第三の人間」といふ言葉は、その第一第二のアントローポスに對する對立を、別な一つのエイドスとしての對立、別な一つの「人間」世界としての對立としてあらはさうとしてゐるやうに思はれるので、それで、私は、この譯語をすて難くも思ふのである。